

2019 年 4 月 27～5 月 2 日

第 4 回アジア・太平洋地区 NCM 実務者会議 於：フィリピン

JNCM・ NCM 日本代表：篠澤俊一郎

背景：

本会議は 4 回目の会議となりそれぞれのフィールドの現状報告と共に、フィールド間の相互関係をどのような形で構築していくかが本会議議題。またフィリピン NCM と NPO 法人フィリピン NCM の働きとの相互関係についても現地視察などを含めて報告する。

実務者会議 - 参加者

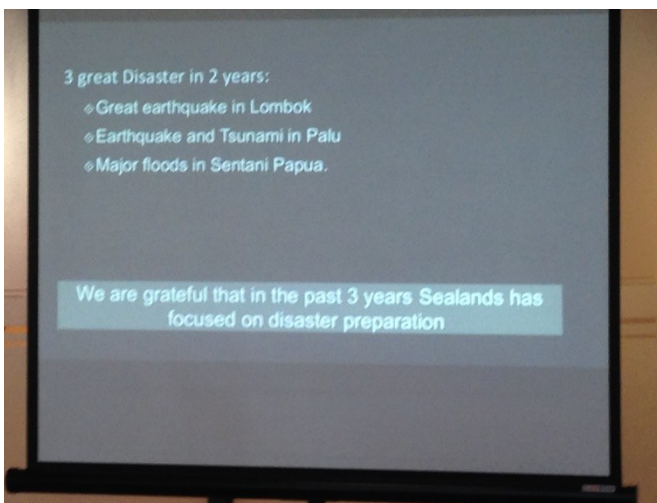
・ 出席国：日本、フィリピン、インドネシア、ミャンマー、カナダ、韓国、パプアニューギニア、アメリカ、8 か国

出席者：篠澤（日本地区）、ダン（フィリピン地区）・ヨディ・イチャベツ（グアム・マリファナ諸島地区）、ロオニ（マレー半島・インドネシア地区）、ジェロム（東アジア/ミャンマー・ラオス・タイ）、ワットン（APNCM コーディネーター）、マテューガルマン（パプアニューギニア地区）、ジャスミン（フィリピン）、ジャナリー（アジア地区 NCM コーディネーター）
ブランドン（世界 NCM 災害対応担当）、オー牧師夫妻（台湾）

29 日 NCM ミーティング

各国の報告を行う前に、報告をする代表がデポジションを行うというスケジュールで進んでいく。

●ロニ（インドネシア・東ティモール・パプアフィールド）



・ 災害支援報告

インドネシア周辺は災害がとても多い国である。

3 月：ニューギニア（インドネシア領）にて洪水が起こり災害支援を行った。

100 人以上の死者。山間部で大量の雨が降り、その事で川が氾濫、流木などによってダムができ、より大きな被害に広がった。パプア（インドネシア領）の教会が支援物資を供給。

また、パプアの NYI が子どものトラウマ防

止支援に加わった。

今回の大きな事柄は、NYI や教会との協力関係が非常によく取れた事である。

インドネシアフィールドは7万以上の島が存在するのでアクセス自体がとても大変であり NCM ですべてをカバーする事が大変困難。しかしそのような中で、各個教会と協力関係によって NCM の拠点が構築され、また他の団体との交流も深まればより効果的な支援が可能である。



●フィリピン NCM の災害支援について

ーキリスト者として大前提となる事項：【誰が私たちの隣人であるか？】 という事を考える事。



【そして災害に対して何を準備すべきなのか？】

前提：災害は世界各地で増えている。そして災害はひとつの要因ではなく複合的に発生する。

ユニセフなどの世界の災害報告において一番の犠牲者は『子どもである』と報告がある。

『こども』をどう支援するかが大きな課題である。

<支援活動に必要なもの>

- ・それぞれのソースを集める
- ・伝える
- ・訓練を行う

※注意する点：フィリピンでは日本と違い、復興活動は国として行う事は難しい現実がある。これは日本と大きな違いである。



例) ライダー災害チームを結成

フィリピンの田舎や災害地は舗装されていないところも多いため、バイクでの支援活動を行う。

そのトレーニングを現在行っている。

※これは日本ではあまり参考にならないが、アプローチとして日本企業はCSRを強く推し進めている。その中で、バイクを使った支援活動は日本企業(カワサキやホンダ、ヤマハ)にとってもいいCSRとなる

可能性があり、日本としてバイクの供給などの支援が可能である。

(理由: 東日本大震災ではJNCMにてフォークリフト・コンテナなどを企業のCSRの一環で供給していただいた経験がある。)



<紛争解決のために>

モスリムの方を招待し、情報を共有し、理解を深めている。

【フィリピンでの支援活動の論理的なプロセス】

ミンダナオは特に政治的な問題もあり、手続きがかなり複雑。しかし、フィリピンNCMはそこをしっかりと網羅している。ファイナンス的な問題も解決している。災害・紛争支援は論理的なプロセスで行われている。これは他のフィールドのモデルとなると思われる。

<参考: フィリピンの災害・紛争支援の現状理解>

- ・ ユニセフやWFPは税金が無料となる。
- ・ 国際的な援助がフィリピンは多い。
- ・ まだ地方政府は緊急対策のシステムが確立されていない。
具体例: 金曜日の夜に起こって食糧が届くのに3日かった。
政府の支配地域・把握しているところのみにユニセフなどが行ける。
- ・ 政府機関は住民登録データがない人たちには物資を供給できない。住民を管理するデータが不足している。⇒ヨランダ台風などでそれらの問題が露呈した。それを今は改善しようとしている。
住民登録がない現状の背景には、多民族国家という問題点が多い。
日本の考え方で理解するのは難しい点がある。
これらの問題を解決するために、論理的なシステムを構築している。
教会での救援のトレーニングが必要である。

フィリピンにおける災害支援は他のフィールドに対してサポートできるほどの技術がある事が今報告で理解され・共有された。

【牧師子弟のケア活動】 - アジア・太平洋地区でもこの問題は重要な課題と今会議で理解された

- ・ 牧師の子どもにしかわからない苦しみがある。それをしっかりとしたカリキュラムで行ってい

る。

フィリピン発のカリキュラムは東南アジア諸国でも少しずつだが取り入れられてきている。

※日本での場合、牧師家庭の子どもが大きな苦しみにある事をまず教団・教会が理解する必要がある。まず各個教会の牧師子弟の状況<今の思い・今の状況等>を知る事が重要であるように思われる。

●NPO 法人 NCM フィリピン報告

OSEC (online sexual exploitation of children)

- OSEC という言葉を知っている日本人はほとんどいないでしょう。東南アジアで問題になっている新しい形の人身売買。

親がネット通して子どもの裸や性的な仕草を欧米に売ります。

被害を受けた子どもは日常生活を送ることができず自殺未遂を引き起こしたり、うつ状態になり社会問題化しています。



現在、NCM フィリピンでは行政と共に OSEC 被害のあった子どもを対象にした児童養護施設を開設している。8名の被害者が在籍(3~18歳)。現在、女性社会福祉士3名、警備員1名がケアにあたっている。



本年度中に左写真の場所に見童養護施設を拡張し NPO 法人 NCM フィリピン事務所ができる予定。

※NCM ジャパンから文房具支援を行った。

●ポリネシア南太平洋地域 (パプアニューギニア・ ソロモン諸島、フィジー、トンガ、サモア、バヌアツ、ポリネシア南太平洋) 報告者 : マルコ・ ガルマン

※パプアニューギニアは 14 の部会を持ち 700 教会、約 5 万人のナザレン会員がいる。

・ HIV にかかっている子どもたちのケアを行っている。

コーディネーターのマティ自身の仕事が大変なこともあり現在はあまり活動ができていない。
是非このためにもお祈りいただきたい。

●台湾フィールド

教会活動として子ども支援・貧困層への子ども支援を行っている。



今、台湾では日本と同じように高齢化社会になりつつある。政府が高齢者に対する支援政策を発表。教会として高齢者支援を行っていく必要性を感じ、ナザレン教団でシニアセンターを開設し、包括的な支援を行っている。

(※日本の高齢者社会の状況を世界は見ており、またその問題から国も政策を立てていると思われる)

現在、政府からの支援を受けて高齢者支援を行っている。これまでも様々な助成金申請もしたが駄

目だったことも多い。(それぞれの教会で)

しかし、シニアセンターを開設し、申請を続けることによって段々と理解されてきたと思う。

※各教会が協力し支援体制を構築していったことが今の形を作った。

●世界 NCM の災害支援・危機管理について (ブランドン氏)

東南アジアが一番災害が多いフィールドといえる。

災害にも様々なタイプがある。

- ・ 干ばつや汚染、台風など (準備ができる災害)
- ・ 津波・地震・火山 (縦鼻ができない)

・ これらの災害は神が起こしているというよりも私たちが起こしているという事を理解する必要がある。

飢饉・飢餓・紛争・技術的な災害・汚染・石油流出・火災・気候変動 (地球温暖化)

- ・ 複合的な災害：福島原発事故

文化の問題 (アルカイダの仏像破壊)、災害後の経済損失



私達は災害支援とはこれほどの規模であることを理解する必要がある。

<災害の原則>

協力と対等の関係が必要。

権力と権威

弱みを持つ人々を理解する必要性：(持病・妊娠・孤立世帯・障害者)

災害支援の重要性はその人が自立できるまでが支援である。

●NYI との関係

NYI と NCM の共同のプロジェクトを昨年、被災したインドネシアにて行い、災害支援を行った。若者のマンパワーと NCM の支援活動を繋げていく事がとても重要である。

ただ、災害現場の問題点（管理者責任）・子どものサポートという形でもこどもとのマッチングなど課題は多いのも事実が先進的に考える事が重要である。

※日本においても NYI との関係性の構築も必要であると考える。

●東アジアフィールド（ベトナム、ラオス、カンボジア、タイ、ミャンマー）

各地域の教会によって成長している教会とそうでない教会があり、その地域における貧困問題を調査してその教会にあった子ども支援を行っている。

タイ・チェンマイにて、教会関係者に教会学校のカリキュラムについてトレーニングを行った。水支援を行っている。

- ・井戸支援：地域の仏教徒・キリスト教徒関係なく使用できるようにした。

- ・移動手段の確保：水上移動する手段がなかったため、ボートを購入し、地方の移動手段を確保

- ・飲料水・生活用水の確保：池の水を浄化



●JNCM と NPO 法人 NCM ジャパン報告

- ・JNCM では災害時に緊急安否確認サービスの構築をこの1年で進めていく。

- ・NCM ジャパン京都事務所は、子ども支援を行っている。その中でも親が自殺未遂を起こした子どももあり、その子どもへのケアを進めている。

また江頭兄の病気で滞っていた東京事務所も今年度より、活動を進めていき、来年・再来年には子ども支援のプログラムができればと進めている。



<各フィールドのメンバー>

フィリピン NCM の教会支援<現場視察>



※マニラ圏内でも一番治安が悪い地域で活動しているナザレン教会の活動を視察。これまでペンテコステ系、カトリック教会が支援活動を行っていたが撤退した。

ここのナザレン教会は日本で言う公共サービスを担っている。

上水道整備・暮らしにおける危険除去・こどもへの支援（避難訓練）・救急医療への情報伝達、地域のゴミ拾い等。

●2010 年から活動を開始し、貧困層の声なき声を拾い行政に働きかけを行い、災害時には APNTS に避難できるように AP の神学校が避難場所を指定するなど強固な相互協力が行われている事が印象的。現在では地域の信頼は強固なものになっている。



ここでの責任者の牧師先生。先生自身にも家族と小さい2名のお子さんがおり、ここでの支援活動はその狭間での葛藤であるという言葉がとても印象的。しかし、支援活動を通して、多くの地域の子どもや青年たちが集っており、素晴らしい宣教がなされている。

原動力は、「神の愛」という言葉がとても印象的。



昨年設置されたコンクリートの壁。この壁がない時にはここで遊ぶ子どもやバイクもここをよく通るが落下事故が多発した。

教会が5年にもわたる行政への働きかけで実現し、安全と、洪水の危険性も大幅に減少した。

写真の右中に見えるのは上水道が整備されるまで使われていた井戸。

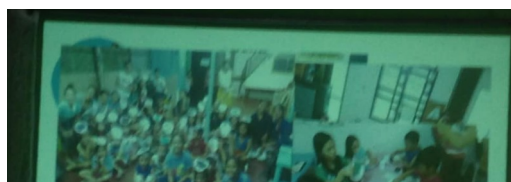
衛生的にも大変

大きな問題であったが、上水道も教会の働きによって整備された。青いホースが上水道のラインである。現在、7家族が1ラインを共有して使用しており、水道代は7家族で折半している。



教会の前にゴミ箱を設置し、ごみはゴミ箱に入れるという意識を持たせる活動を行っている。

教会において、災害時にどう対応する必要があるのかをわかりやすいイラストや塗り絵で子ども達に教育している



貧困地域における緊急医療が必要な時に駆けつける救急隊の方々。教会との繋がりが非常に深い事がよくわかる。

ゴミ拾いなどの活動も行っている。教会の地域は協力的だが、川上流の地域はその意識が希薄なので、これからの課題は他の地域への働きかけだという。



教会のメンバーとの集合写真。

<まとめ>

各フィールドの支援活動はそれぞれの現状や背景がありそのまま行う事は出来ないが、大切な事は教会の使命は地域の声なき声をどう拾えるかどうかという点は共通していた。

また牧師子弟のケアやプログラムの作成は日本でも特に急務であるとする。

次回予定 2019年10月 タイ・チェンマイ アジア・太平洋地区カンファレンス